

町長 ひとりごと

(32)

齊藤 讓

今日も暮れゆく
異国の丘に
友よつらから切なかる
がまだ待つてろ
嵐が過ぎりや
帰る日も来る春が来る
七月二十日。この日は真夏日
を思わせるような、暑い一日
であった。その昼下り、野栄
町の民宿で開かれた、匝瑳郡
市シベリア抑留者の集いは、
この「異国の丘」の合唱でし
めくくられた。会場には、四
十名ほどの人達が集まってい
た。聞けば、匝瑳郡市の抑留
者の現在の人数は約百八十名
で、このうち光町は約五十名
だという。既に亡くなった方
々を加えれば、この数は更に
増えるというし、全国では、実
に五十万の多きに達するとい
うのである。曾てこの人々は、
あの極寒のシベリアで、言葉
ではいい尽くせない辛酸を嘗
め、忍耐に忍耐を重ねながら、
ひたすら望郷の思いを募らせ、

帰国を待ちわびていた不屈の
勇者達である。その後四十年
の時の流れは、非情にも目の
前の勇者達の頭に霜をおき、
顔に深い皺を刻み、張りを失
くした両肩には、寂しげな老
いの陰を落していた。
みんなの歌声は、意
外なほど若々しく、
その両眼は、まるで
遙遠いシベリアの地
を見つめるかのよう
に、とても穏やかであった。
しかし、これとは裏腹に歌の
一節一節には、聞かざる者の胸を
抉るような悲愴で生々しい情
感が籠り、いまなお決して忘
れることのできないシベリア
に対する万感の思いが、激し
く渦まいてくるかのようであ
った。
多分、これから歳を経れば経
るほど、この思いはいっそう
凝縮され、それぞれの心の中
で、熱くそして大きく生き続
けていくことであろう。

異国の丘

私は、何とも名状し難い、重
く切ない感慨に襲われた。
ところで、私は、物心ついた
のが戦後もだいぶ過ぎた頃で
あるから、戦争の悲惨さを体
験したことはない。だから、
戦争の本当の恐ろしさや、愚
さは、体験者の話しや書物、
写真などで理解したにすぎな
い、いわゆる戦争を知らない
世代の一員なのである。
もし、私が戦争の悲劇を語っ
ても、真実味や説得力に欠け、

を思い浮かべては、涙を流し、
小さな胸を痛めて、激しく戦
争を呪った少年の日の頃を鮮
明に思い出すのである。
もしや、もしやの祈りにも似
たこの母親の願いほど、外地
で終戦を迎えた息子や夫達の
安否を気づかい、帰国を待ち
わびる当時の母や妻、家族の
切ない心情を象徴しているも
のではない。
「私の抑留期間は、五年であ
った。」「私は、四年。などと
語る人々の座の中で、
私はいまさらながら
この人達の当時の本
当のご苦労を、全身
にとり肌がたつ思い
で聞いた。またその一方で、
当人にも勝るとも劣らないご
家族の苛酷な「岸壁の母」の
心痛が思はれてならなかった。
戦に、聖戦などというものは
ない。悲劇は、一度で沢山で
ある。将来、日本がいかなる
事情、局面に立たされようと、
決して再び戦争の悲劇を繰り
返してはならない。
今日の日本の繁栄は、いま老
境を迎えた人々こそが、敗戦
という大きな犠牲をのりこえ
て築いてきたものだ。この社

会は、いま戦争を知らない世
代に、これからの行末を託す
る世代交代の時期に入ってい
る。徳川三代將軍家光は、將
軍職に就くとき諸大名を前に
「余は、生まれながらの將軍
ぞ」と威圧した話しは有名で
ある。これから、日本の社会
を肩にかける若者は、これと
似た生まれながらの、平和の
申子世代である。現在の社会
の中で、また、特に若者達の
中で一番欠けているものは、
他人を思いやる心であり、苦
難を耐え忍ぶ心である。この
二つの心なくして、真の社会
の繁栄はあり得ない。この心
を養い育てるのに、特別の教
師や教育はいらない。家庭や
地域の中で、お爺さん、お婆
さんが現代の語部となつて、
自分達の歩んできた人生の苦
難の道程を、子や孫にしっか
りと語り継いでいただくこと
で十分だと私は考える。これ
は、後輩に対する先輩として
の務めでもある。
私は、「異国の丘」や「岸壁
の母」の血のどるような叫び
を、日本人の心の戒として、長
く後世に伝えてゆくべきだと
思っている。